

VOL.2 あかねさす

EU - 日本学 NEWS

Program for EU-Japanology Education and Research (PEJER)

目次

- 1 EU-日本学教育研究プログラム本格始動
 - 2 フィールドワーク1「天平の文化遺産を巡る」
 - 3 フィールドワーク2「京都に公家文化を訪ねて」
 - 4 フィールドワーク3「齋宮の歴史を辿る」
 - 4 ネラ・ノツパ氏 公開講座報告
 - 5 EU-日本研究センターの開所式
 - 6 6～9月の予定
- KUワークショッププログラム



ド・ロニー編『日本文集』（1863年刊、扉）
この年、非公式ながら帝国図書館で最初の
日本語講座が開講された。



『パリ案内』（全2巻の第1巻、扉）
1867年のパリ万博に合わせて刊行された。
「序文」は文豪ヴィクトル・ユゴーによる。

EU-日本学教育研究プログラム本格始動

平成20年4月8日（火）、本プログラムの最初の授業として「EU-日本学講義」が開講し、現在約30名の受講生が個人の研究分野を基にEU-日本学研究を進めています。

開講前にそれぞれ3回ずつ行われた説明会や公開授業では多くの方にご来場いただき、その成果もあって当初の予定を大幅に上回る受講者数となりました。

受講者内訳

	英米文化	国語国文学	芸術学美術史	フランス語 フランス文学	日本史学	西洋史学・ アジア史学	文化共生学	計
フィールドワーク(1)	2	11	2		7			22
フィールドワーク(2)	2	12	3	1	7			25
EU-日本学講義(1)		12	2		5	1	1	21
EU-日本学講義(2)		11	2		4	1	1	19
学術コミュニケーション(1)		10	1	1	5			17
学術コミュニケーション(2)		10	1		5			16

19世紀フランスにおける日本学の展開と万博

担当した2回の講義のうち、まず第1回は、日本語・日本学がヨーロッパでどのように開始されていくのかを、おもにフランスに焦点をあてながら概観しました。制度的な日本語教育の基礎を築いたレオン・ド・ロニーに関しては、幸いにも本学総合図書館に彼自身が編集した教材のひとつ、『日本文集』（Recueil de textes japonais）が所蔵されていたので、それに即して実際の授業や試験内容を具体的に紹介しました。

第2回は、この時代に繰り返し開催されたパリ万博を追いながら、西洋に固定的な「日本イメージ」が形成されていく過程を検討。ジャポニズムの影響下、万博にあわせて上演された日本の演劇やスペクタクルが醸成するオリエンタリズムとそのなかでつくられていく「日本」の表象を、同時代の資料にもとづいて探ってみました。

導入的な授業でしたが、提示した資料に関心を抱いた受講生も少なからずいたようです。（EU-日本学講義担当 文化共生学教授 柏木 治）

思考を的確に言語化すること

「学術コミュニケーション・トレーニング」は、海外に向けて自分のことばで情報発信できるようになることを目指すリレー講義科目である。「日本語」の授業では、次のような話題提供を行った。

日本語は英語とちがって、主語や目的語を省略して話すことができる。たとえば日本語では「食べる?」「うん、食べる!」のような会話が可能であるが、英語ではそうはいかない。英語では「だれが」「何を」という情報を言語化しなければ文そのものが成立しないからである。逆に、日本語話者が英語を話すとき、考えたことをそのまま訳そうとしてもうまくいかない。「だれが」「何を」といった言語化されていない情報が日本語で意識できてはじめて、単純でも的確な英語表現が導かれるのである…。

全3回の講義の後、受講生から「思考を的確に言語化するおもしろさがわかった」と感想をもらった。まずは責務を果たすことができたようで、ほっと一安心である。

（日本学学術コミュニケーション担当 国語国文学専任講師 高木 千恵）

「天平の文化遺産を巡る」

●実施担当者

米田文孝（「日本学フィールドワーク」主幹、歴史学専修教授）、西本昌弘（歴史学専修教授）、長谷洋一（芸術学美術史専修教授）、大島薫（国語国文学専修教授）（25日のみ）、ネラ・ノッパ（ルーヴェン・カトリック大学 関西大学日本・EU研究センター特別学術職員）（25日のみ）、豊山亜希（関西大学EU－日本学教育研究プログラム リサーチ・アシスタント〈当時、現ポスト・ドクトラル・フェロー〉）

●参加学生：12名

（内訳）

専修	平成20年度大学院 入学予定者	修士課程	博士課程	交換受入 留学生	計
国語国文学	0	5	2	1	8
歴史学	1	2	0	0	3
芸術学美術史	0	0	1	0	1
合計					12

●実施行程

日時	内容	
平成20年1月24日（木）	午後	関西大学に集合→電車で奈良へ移動→奈良県立美術館見学→正倉院見学→奈良市内に宿泊
平成20年1月25日（金）	午前	興福寺国宝館見学→東大寺巡検（西大門址・西塔址・二月堂等）
	午後	名勝大乗院庭園文化館にて歴史建造物に関する講義を聴講後、奈良町巡見（元興寺・奈良町物語館・元興寺塔址・ならまち格子の家等）→電車にて移動し、関西大学へ帰着後解散

●実施内容報告

「日本学フィールドワーク」科目では、平成20年度副専攻科目の履修希望者を対象に、模擬授業の一環として、平成20年1月24日（木）～25日（金）の2日間、奈良市内においてフィールドワークを実施しました。雪が舞い散る厳寒の中、本学OBの学芸員の案内による奈良県立美術館のバックヤード見学を皮切りに、正倉院、興福寺国宝館、東大寺（西大門址・西塔址・二月堂など）、奈良町と、奈良市内をフィールドに実地調査の醍醐味充分の行程となりました。巡見先には、一般見学が認められていない史跡や施設が少なからず含まれており、参加者は貴重な実見機会に何を耳にするのか、また自らの目で得た資料がいかに重要であるか、といったフィールドワークの意義を体験的に学習しました。また参加者には担当教員より、「800語程度の英文レポート提出のこと」との課題通達が事前に出されていたため、参加者は各巡見先で英語の案内版を書写あるいはデジタルカメラで撮影、外国人用の英文リーフレットを入手するなど、本プログラムの趣旨である「日本学の国際発信力」を実践的に体感する場ともなりました。

さらに参加者の多くは平成20年度に正式開講した「日本学フィールドワーク」科目に履修登録しており、院生自ら企画・立案するフィールドワークの実施にあたり、模擬フィールドワークが、彼らの調査研究におけるモチベーションや問題意識を向上させる一助になったという点で、非常に大きな収穫を得た模擬授業となりました。



第1日目 正倉院にて



第2日目 東大寺西塔跡にて
西本先生の解説に耳を傾ける参加生



第2日目 名勝大乗院庭園文化館にて
奈良市職員による講義を聴講

「京都に公家文化を訪ねて」

●実施担当者

田中 登（文学部国語国文学専修 教授、実施責任者）、大島 薫（文学部国語国文学専修 教授）
殿本 佳美（関西大学EU－日本学教育研究プログラム 事業推進支援スタッフ・企画担当者）

●参加学生：17名（在籍者、次年度入学者）

●実施行程

日時	内容
平成20年3月13日（木）	関西大学に集合（12:00）→冷泉家住宅見学（14:00）→京都御所見学（15:00）→京都文化博物館見学（16:00）→宿舎へ移動（17:00）
平成20年3月14日（金）	京都における出版文化を巡る巡検（10:00）→陽明文庫（近衛家）見学（14:00）→大学へ移動（16:00）→解散（18:00）

●実施内容報告

（1日目）現在の京都御所と今出川通を挟んで北に位置する冷泉家は、平安・鎌倉時代の歌人藤原俊成・定家を祖として現在まで約800年続く「歌の家」であり、その住宅は現存する唯一の公家住宅として重要文化財に登録されています。今回の模擬フィールドワークでは歴史的な観点から解説していただきながら、通常では見ることができない冷泉家住宅の見学が実現しました。

続く京都御所では35分の短縮コースを利用して新車寄、紫宸殿（承明門より）、小御所、御常御殿、御池庭などの見学をしました。現在の御所は里内裏のひとつであった東洞院土御門殿が1331（元弘元）年に御所となったもので、建物は江戸時代の安政年間に造営されたものですが、その様式は平安朝の古制を復活させたもので、古の宮廷の様子をうかがい知ることができました。

京都文化博物館は大規模な模型を用いた展示が特徴的で、京都のさまざまな歴史や文化を視覚的に体感することができました。また、建物の一部は赤レンガ造りの旧日本銀行京都支店（重要文化財）となっており、明治時代の近代建築にふれる良い機会となりました。

（2日目）午前中は宿舎に程近い鳩居堂を始めとする寺町界隈の古書店を、田中教授に解説いただきながら巡りました。その後は祇園や白川沿いの花街や錦小路などを各自の研究テーマに沿って巡検し、その成果をレポートにまとめました。

午後に訪ねた陽明文庫は、平安時代の五摂家の筆頭である北家の嫡流である近衛家の典籍や古文書などを集めた京都市右京区宇多野にある文庫で、藤原道長自筆の『御堂関白記』（国宝）を始めとした貴重な典籍を所蔵しています。その他にも陽明文庫本源氏物語や絵巻や掛け軸に仕立てられた和歌懐紙などの展示物があり、参加者は名和修氏（陽明文庫文庫長）に次々と質問をしながら作品への理解を深めました。

今回の京都模擬フィールドワークでは現存する唯一の公家住宅である冷泉家住宅で公家文化の一端を垣間見ることができ、また陽明文庫では普段ガラス越しにしか目にすることができない資料を間近に見ることができました。詳しい解説とともに貴重な文化財にふれられたことは、今後「EU－日本学」を研究する参加者にとってたいへん有意義な体験になったことと思います。



冷泉家の大玄関 式台と立部



冷泉家 上の間・中の間にて



承明門から紫宸殿を望む京都御所

「齋宮の歴史を辿る」

●実施担当者

田中 登（文学部国語国文学専修 教授、実施責任者）、大島 薫（文学部国語国文学専修 教授）、
殿本 佳美（関西大学EU－日本学教育研究プログラム 事業推進支援スタッフ・企画担当者）

●参加学生：6名（在籍者）

●実施行程

日時	内容
平成20年3月26日（水）	齋宮駅集合(13:00)→齋宮歴史博物館(13:30)→いつきのみや歴史体験館(15:45)→難波駅にて解散(18:00)

●実施内容報告

齋宮（さいくう）とは、天皇に代わって伊勢神宮に仕える齋王の宮殿と役所である齋宮寮があった場所の名称です。齋王は天皇が代わるごとに新しい未婚の内親王（女王）の中から選ばれ、天皇が譲位するまで退下することができませんでした。齋宮模擬フィールドワークでは、平安時代中期の朱雀天皇の御代に齋王となり、次の村上天皇の女御となった徽子女王（齋宮女御）の家集である『齋宮女御集』の鎌倉時代の写本などの見分け方について、詳しく解説していただきながら見ることができました。

映像展示室では再現映像によって都から齋宮までの齋宮群行の理解を深め、その他の展示室では齋王を選ぶための卜定（ぼくじょう）に使用された亀甲や齋宮復元模型などを見、年表によって齋王制度の起源から衰退まで詳しく解説していただき、その後いつきのみや歴史体験館へ向かう途中、10分の1サイズで再現された史跡模型を見学しました。

いつきのみや歴史体験館では当時の香を聞き、齋王が使用した輿である葱華輦（そうかれん）の乗車体験や桂（うちき）を羽織るなどの体験を通じて当時の生活を体感することができました。



齋宮歴史博物館全景



桂の着付け体験

日本仏教と日本の食文化史・生活史を考察するために必要な体験的学習

●実施担当者

田中 登（文学部国語国文学専修 教授、実施責任者）、大島 薫（文学部国語国文学専修 教授）、
殿本 佳美（関西大学EU－日本学教育研究プログラム 事業推進支援スタッフ）

●参加学生：6名（在籍者）

●実施行程

日時	内容
平成20年3月29日（土）	万福寺山門集合(11:00)→「普茶料理」（教学部・前田和尚による解説と、大島が「禅」における食について解説）(11:30)→万福寺拝観・寺僧による境内解説・法話(13:00)→聞茶体験（宇治市「かんばやし」）(14:00)→平等院拝観(15:00)→現地解散(16:00)

●実施内容報告

「日本仏教と食文化史・生活史を考察するために必要な体験的学習」は、禅宗が日本にもたらされた後に、日本仏教界に与えた影響の諸相（仏教学におけるアプローチ）を考察するために貴重な体験学習であることはいまでもありません。ただし、この体験学習において、もう一点重要であるのは、宗教が人々



普茶料理

の生活に多大な影響を与えることを「知る」ことであり、禅が日本人の「衣・食・住」に与えた影響を体験的に「知り得る」ことでございます。宗教史と社会史、さらには生活史を視野に、新たな教育研究領域を如何に考究するべきか、この体験的学習は必ずや、学生たちの意識を喚起するものになったことでしょう。日本人の生活史（とくに言えば民衆生活史）に関する考究は、より学際的な視点を必要とするのもあって、政治史などに比べますと、立ち遅れているというほかございません。

万福寺は、江戸時代に創建された後、大陸の情景そのものを写した境内であると見做されておりました。江戸時代の人たちにとっては大陸そのものであり、その文化を伝える窓口であったことが知られております。いまだ行きせぬ異国情緒に、種々に異なる生活様式を学んでいたものと推察されます。また宇治の茶も、禅文化との関わりにおいて取り上げるべき課題となります。

今回は、禅がもたらした「種々の作法」とくには「食」に関わることを学ぶべく、体験的学習を実施いたしました。万福寺に饗される「普茶料理」は、本来は、禅宗寺院で営まれる仏教儀礼において食されておりました。禅宗では「食」も修行であり、それを食する「作法」にも、禅特有の意識が投影されております。禅以前に、日本に根付いた仏教の諸宗に鑑みましても、それぞれの寺院で営まれる儀礼において、一連の「次第」を提示するうに、「食」を明記することはありませんでした。禅宗の儀礼において「茶礼」が明示されていることが、いかに驚愕であったかが理解されます。

宇治における「茶」も、我々がよく知る「茶道」つまり千利休以前から、さまざまに日本文化に浸透しておりました。本体験的学習において、聞茶の体験を行いますのも、「喫茶」を通して、日本文化をいかにとらえ、研究課題として問題を設定することができるか模索するためです。

この体験的学習は、日本人の精神に多大な影響を与えた「禅」を通じて、日本の食文化史を考究するもので、テキストに記される「作法」を文字情報としてでなく、より深く理解するために「実体験」が有効であることは明らかです。

ネラ・ノッパ氏 公開講座報告

平成19年1月23日の公開講座では、本学がベルギーのルーヴェン・カトリック大学内に設置している「関西大学 日本・EU 研究センター」の特別学術職員ネラ・ノッパ氏をお招きして、ヨーロッパ諸国で急速に広がりを見せる Japanese culture であるマンガを使った研究プロジェクト「Let's Manga」についてご講演いただきました。

『コミックを使った日本学教育』

1. 海外において、なぜマンガが日本を紹介するのに最も効果的なのか

はじめに文章とイラストの2つの題材を示して「日本を知らない外国人にとってどちらが覚えやすいか」というクイズ形式で出題し、視覚的に理解できるイラストの方が簡単に覚えられることを示しました。細かい情報を伝えるのにはテキストが適当ですが、全体的な情報を伝えるにはポップカルチャーの面白さがあり、多くの情報量をきれいに楽しく伝えることができるマンガを用いる方が「簡単に、早く、楽しく」暗記するのに適しています。

2. Let's Manga プロジェクト紹介

Let's Manga プロジェクトでは、マンガを教材として使う方法を研究し、実際に授業でもマンガを使用して講義を行っています。またオンライン教材やマンガ研究資料を発展させ、大学生だけでなく一般の人たちにもマンガを勉強できるようなブログ・Wikiといった教材も作っています。また和蘭辞典にマンガの語彙を載せる活動も行っており、その目的はマンガの訛りや独特な表現が学生にとって読みにくいものであることを解消するためです。

3. プロジェクトの成果とこれからの可能性

Let's Manga プロジェクトを進めてきた結果、マンガが大学の授業や一般人向けのワークショップなどで日本の社会・歴史・経済への理解を深めるための教材となり、また日本学のためのオンライン教材の発展に貢献しています。今後はマンガを通じて日本語能力を育てることや、大学の日本学部以外の人たちにも日本について興味を持たせることができると考えます。

また、現在マンガは主に英語で研究されていますが、オランダ語でマンガを紹介する書籍や教科書を作り、マンガの語彙を収載した和蘭辞典を活用していきたいと考えています。



講演の様子

EU-日本研究センターの開所式

関西大学創立120周年事業としてルーヴェン・カトリック大学(ベルギー)に設けられたEU-日本研究センターの開所式が、2007年3月に挙行され、あわせてジャパン・ウィークと銘打ってさまざまな行事が開催された。11日にはEU大使・ベルギー大使ら招待客の列席の下、両大学学長の挨拶と協定書へのサインがあり、引き続き、能楽師山本章弘氏による高砂の演舞、関屋俊彦教授による狂言教室、さらにルーヴェン・カトリック大学日本学科学生による狂言の披露があった。

翌日以降は3夜連続で、「たそがれ清兵衛」「隠し剣鬼の爪」「武士の一分」の山田洋次監督作品三部作が市内の劇場で公開され、監督自身が登壇し、対談した。また学術企画として「屏風とヨーロッパ」をテーマにした講演(同時に豊臣期大坂図屏風の複製が展示された)や、十二単の着付教室などが行なわれた。どの会場にも多数の学生・市民が参加し、ジャパン・ウィークは大成功を収めた。

(EU-日本学教育研究プログラム代表 文学部教授 藪田 貴)



調印式の様子

6～9月の予定

- 6/26(木) 学術コミュニケーション・トレーニング ミニTV会議
- 7/4(金)～6(日) KUワークショップ(於:関西大学)
- 7/17(木) EUワークショップ 参加者説明会
- 9/12(金)～14(日) EUワークショップ(於:ルーヴェン・カトリック大学)

KUワークショッププログラム

7/4(金) 開会・記念講演

- 13:30 開会
- 13:40 記念講演(1)
- 14:40 休憩(30分)
- 15:10 記念講演(2)～16:10
- 17:00 ウェルカムパーティー
～19:00

7/5(土) 研究発表

- 10:30 セッション1・2
- 12:30 昼食
- 13:30 セッション3・4・5
～17:30

7/6(日) フィールドワーク

- 10:00 大学図書館前 集合
団体行動(昼食含む)
- 13:00 グループ行動～17:00
- 18:00 フェアウェルパーティー
～20:00



KUワークショップのプログラムは

<http://www2.kansai-u.ac.jp/eu-japan/poster/EU-workshop.pdf>

からダウンロードすることができます。



EU-Japan Weekのポスター

EU-日本学プログラム推進室(尚文館2F)

開室時間

月～金/ 10:00～17:00

住所

大阪府吹田市山手町3-3-35

URL

<http://www2.kansai-u.ac.jp/eu-japan/>

E-mail

eu-japanology@cm.kansai-u.ac.jp

TEL

06-6368-1111 (+4846)